

「行動する保守」の論理(5)

——トンデモ本から歴史問題をめぐる嫌悪感へ・ε氏の場合——

樋口直人

(徳島大学総合科学部)

Logics of the ‘Aggressive Conservative’ Movement (5)

The Case of Mr. ε

HIGUCHI Naoto
University of Tokushima

1. 経緯

本稿は、日本を護る市民の会、主権回復を目指す会、排害社などの排外主義運動に参加したε氏(40代男性)に対して2012年6月4日に行った聞き取りを再構成したものである¹。氏とは活動現場でなく、ひよんなきっかけで知り合うこととなり、筆者の研究に関心を示して積極的に聞き取りに協力の意思を示した。実際の聞き取りに際しても、入念に準備して議論を整理し、必要に応じて動画などを示しながら説明していた。

こうした例はかつてなかったことで、活動に至る経緯やイデオロギーが詳細に述べられている。それが持つ含意については最後に考察するとして、次節以降ではε氏の言葉をそのまま用いて彼の経験を再構成していきたい。

2. 政治に対する関心

ありましたね。親の付き合いというか、一時期『赤旗』をとってそれを熱心に読んでいた時期がありました。選挙権を持った当時はすごく政治が嫌い

というか、一票投じたところで何も変わらないからいやっていう感じで。だから棄権ですね、ずっと。でも、20代後半以降になって、それではいかんと思うようになって、大体白票を投じるようになりました。自民党に投票したことはないです。一度もないです。政党では共産党だけ。今は白票ですね。(白票を投じるのは)抗議ですね。政治ってなんか最初からマイナスイメージなんです。

たとえ話しますと、ホットケーキがありますよね。ホットケーキは一部の人だけのもの。その一部の人たち、誰からも文句言われぬようにホットケーキを切り分けて配る、それをみんなに、一部の人たちが配る。それが政治、僕はそういう風に理解しています。利権の分配と利権をめぐる争い、そういう風に認識してるんです。

共産党の場合、汚さがないんです。金にまつわるものがないじゃないですか。主義主張にしても、はっきり主張するんです。それが自民党に比べてすごく好感を持ったんです。これは後の西村修平さんの支持の伏線になってるんです。ただ、マルクス＝レーニン主義の思想ですかね、そっちの方は全然興味がないというか、理解できなかったです。わからなかったです。要は姿勢ですね、表面的な、そういうものに共感したんです。一時期そういう(共産党に)

¹ 2011年2月から続けている聞き取り調査の一環である。調査方法や筆者の立場については、樋口(2012a, b, c, d, e)ですべて述べられており、必要に応じてご参照いただきたい。

投票していたことがあった。(共産党に投票をやめたのは) 勉強すると、日本共産党はコミンテルンの日本支部というか、工作機関なんですね。大日本帝国に革命を起こして体制をひっくり返そうというか、その工作機関として設立されたわけです。そういうのを知ると支持はできないです。

3. 外国人との接点

ありますね。ただ、韓国人と在日朝鮮人が主ですね。で、あと中国人ですね。まず、韓国人から言いますと、幼少の頃ですね、近所に韓国人一家が住んでたんです。知り合うようになったきっかけはよく覚えてないんですけど、表札があるじゃないですか、そこにハングル文字とか書いてあるんですね。で、「これは何だ」と友達とわいわい言っていた時に、中から人が出てきて、それで関わるようになった。あくまでも子ども達だけ(の付き合い)ですね。でも一時的なものですぐ引っ越して行っちゃったんですけど。学校には通ってなかった——民族学校っていうんですか、ですから同じ小学校には通ってなかったです。別にそれが個人的な恨み(につながつた)とかないです。彼ら普通に日本語話してましたし。外国人という認識は持たなかったです。ちょっと目が釣り上がっているように見えたり、へんな文字使っていたり、日本の学校に通わないとか、それをちょっとおかしいなと思っただけで。

朝鮮人の場合は、少人数制の予備校に通っていた時に、大検の資格を取るために来ていた人がいたんです。その人は、顔が面白かったので、自分の方から話しかけて関わるようになったというか。フビライ・ハーンに似ていたんです。特徴のある顔ですよ。幅が広くてはの字眉毛で目が細くて、あんな感じだった。変わったものに対する好奇心というか、自分の方から近づいて、今から思うと随分と失礼なことを言ったと思うんですけど、向こうもよくしてくれて、帰りの電車で一緒に帰って。予備校だけの付き合いだったんですけど、まあそんな関係、世間話するような感じですね。

中国人は、まあそれに近い年なんですけど、親の知人の紹介で建設現場で働いたことがあるんですよ。その頃は不動産バブルの——92年のバブルの余韻が残っていて、3K——キツイ、キタナイ、キケン——そういう仕事は日本人がいなくて、中国から来た

人が僕のいた現場にもいたんですけど。朝鮮の人と違って、中国の人は異質っていうか、明らかに不潔な、嫌悪感を持ちましたね。明らかに自分達と違うものを感じて。言葉も違いますし。

中国人の場合は、政治的に関わるんです。要は排外主義の形成の原因になっている——1つの原因になっているんです。生理的嫌悪感をすごい持ちましたね。甲高い声でまくし立てるような言葉が本当に耳障りだったんですよ。それで、中国人に関するセンセーショナルな本を読んだんですよ。黄文雄——台湾人の立場ですごく中国を悪く書いている——あれを読んだんですよ。中国人と関わってそれで衝撃を受けたおかげで、どうなんだってことで。嫌悪感とか軽蔑の感じですよ。こういう人たちが日本に来るって、乗っ取られるというか関わりたくないって。

今の僕の中国人に対する観念は、黄文雄さんという本と僕の個人的な経験で培っているんですよ。中国人に対するステレオタイプ的なマイナスイメージというんですか、公共の概念がなくて整列乗車しない、あたりかまわず痰を撒き散らすとか、自分を守るために平気で嘘をついたり、盗むことに対する……。あとは、これも本で読んだんですけど、中国ってトイレ文化がない、水がないところですから、流すって習慣がないんですよ。ウンチをしたら流すのは後から使う人の役目だ、と本で読んでちょっと信じられなかったんですけど、自分がそういう目にあった。建築現場に事務所代わりに近くのアパートを借りて、そこに中国人の労働者が寝泊りしていて僕もそこで着替えていたんですけど、ある日トイレに入ったらまるまるのウンコが……それで嫌いになりましたね。

だから僕は中国と韓国という、すぐ思い浮かぶのはウンチと……ですね²。韓国も多いですね、嫌がらせに大便を使うとかそういうニュースが流れます。衝撃的だったのが『朝鮮日報』で、フライドチキンに虫が入っていたことに腹を立てて、大便を汲んできて店に撒き散らした——そういうニュースをネットで見ると……。 (それまでの中国に対するイメージは)『西遊記』ってあるじゃないですか。悠久な大地に住む大らかな人々、そういうイメージしかなかったですね。実際に生身の人を見て変わりました。あと個人的に恨みとかないんです。けんかしたとかそ

² 「…」の部分は聞き取れなかった。

ういうことも。

中国人と韓国人では、同じ排外主義でも全然理由が違いますよ。韓国は政治的なものに対する嫌悪感で、中国は恐怖心ですね。黄文雄さんの本から得た知識なんですけど、中国ってのはどうしてあんな広大な国になったのか、あれは侵略したんじゃないんですよ。1つの王朝が崩壊して内乱が始まりますね。そうすると流民が発生するわけです。それが周辺地域に散らばって、周辺地域で多数になったのを呑み込む形で中華は大きくなったんです。長城から北って元は中国じゃなかったんです。日本も同じように北海道とかああいうところで多数になると、中国になる。これは阻止しなければならぬと思っ

4. 活動のプル要因

《インターネット》

まず、インターネットとの接点があるじゃないですか。元々、株をやる前は競馬に興味があったんですよ。競馬場に通っていたんですけど、それが段々苦になって自宅にいながらコンピュータで予想の過程を自動化というんですかね、コンピュータ言語を学んでシステム化して…。そんなことを考えていて、インターネットとかパソコンですかね、CS デジタル放送とか通信関連の技術革新に興味持ってて、Windows 95 が出て、本格的にインターネットの時代が始まるじゃないですか。僕も始めたんですけど、動機は競馬のパソコン投票。アニメとかじゃないんですよね。中央競馬と地方競馬って両方あったんですけど、ネット時代になってからパソコン投票で買えるようなシステムができたんです。98年の5月に初めて Windows 95 のノートパソコン買って、それから2002年ぐらいまでずっとそんなCSも継続して、それ見ながら——趣味なんですけど、それで生活送ってて。

それが挫折してから株なんです。僕はギャンブルとかじゃなくて、投資としての競馬というのを考えていて、いろいろ単勝が出るからとか、いろんなやり方を試したんですけど、最終的にうまくいなくて、諦めて株を始めた。それが2002年なんです。転換期となったのが、ブロードバンドですね。ADSLという技術が2000年くらいにできて、僕も2002年の9月12日に契約して、そこから常時接続のネット環境ができた。これがライフスタイルを大きく変え

ちゃった。(それまでは)投票の時だけつながるって、従量制ですから長くつないでいるとお金がかかってうんです。それを嫌って…。

それが常時接続になると、ライフスタイルが変わっちゃうわけです。要は無制限ですから、ずっと家にいて一日中用事がなければ朝から晩まで——仕事がない日ってことですね——ずっとにらめっこしてるんです。ネット廃人って社会不適合者への方向性が決定的に…そういう時期。だから昼間の仕事もやめる原因になったのも、これが影響しているんです。働いて収入を得るよりも、ネットに向かって知恵を働かせてお金を得るっていうんですかね。

…生き甲斐が持てなかったんですよ、働いて。ただ生活費のために働く、嫌なことをやるっていうか、そういうのが得意じゃなかったんです。別にお金はどうでもいいんですけど。生き甲斐とか誇りを持てるようなもの、そういうものがあればそれに打ち込みたかったんですけど、そういうものがないので。でも、生活のために働かなければならないとか、それがちょっと納得いかなかったんですよ。親は「みんなそうやってるんだから、それが当たり前だ」というんですけど。かつては助言に従って、望んでもいない大学受験して、浪人して、それが何にもならなかったわけですから、「みんながやるからお前も」というのは…。

その時は株で当てる自信がなかったんです。要は競馬が不発だったんで、次はこれって感じです。で、ネットで株だけじゃないんですよ。合間や暇つぶしにネットサーフィンをするんです。2ちゃんねるとかYahoo!掲示板とか。その当時は日韓ワールドカップがありましたよね。それで、韓国人のマナーとかいろいろ問題があって、嫌韓コピペっていうんですかね、韓国を誹謗するようなアスキーアートとか、僕が見ていた嫌韓というんですかね、韓国を誹謗するというか、ああいうのがいっぱい貼られて。僕が見ていた関係ない経済とか市況の板とか、そういうところまで貼られるようになるわけです。韓国人を誹謗中傷するような…。ですからいやでもそういうのに向き合うようになったというか。

《歴史認識の問題》

あとは、僕は基本的に歴史の知識があったんですよ、素養として。ネット掲示板の歴史議論をはたか

ら眺めているわけですよ。おかしいものがあるれば、あるいはネット右翼と左と在日朝鮮人とで歴史——植民地時代のいろいろなことについて議論を戦わせていたわけで、興味があるものについては個別に横槍を。その時に、僕が横槍を入れたわけですよ。それで相手から右翼認定受けたんですよ。その当時、僕は在日朝鮮人問題に対する認識は特になかったんですけど、イメージとしては「望んでもないのに日本に連れてこられた」恨み節を口にする人たちが、同時に日本に居座り続けて民族としての権利というか主張するのは、道理に合わないと思ったんですね。

多文化共生じゃなくて——むしろ民族の権利でいうのなら、南北の祖国統一を求めなきゃおかしい。僕は、朝鮮人は朝鮮半島に帰るべきだと思ったら、（ネットでの相手が）右翼だといったんです。どうして右翼なんですかと聞いたら、明確な答えが得られなかったんですね。歴史的にも右翼って朝鮮人に排他的というか、とったことがないんですね。昔、玄洋社ってあったじゃないですか。頭山満とか内田良平とか、その思想ってのは、日本と朝鮮は欧米列強の侵略に対抗するために、アジアは団結していかなければならないという考えを持っていた。金玉均とか知ってますか——明治維新を実現した日本のように近代化を目指す、層としては開明派の知識人。そういう人たちを日本の右翼が支援した。あとはいくら、東学党の乱とか覚えてますか。それも日本の右翼というのか、内田龍平の国龍会とか支援してたわけですよ。ですから、「朝鮮出て行け」は右翼の考え——そういう主張をしたことはないんですよ。今も昔も。それなのになんで自分が右翼認定されるのか、それがきっかけですね。

義務教育ですかね、いわゆる自虐史観を植えつけられた覚えがないんですよ——「日本はアジアで悪いことしました、反省しなければならない」。歴史に関しては、プラモデルあったじゃないですか。零戦とか軍艦、ああいうのを作っていた関係で、特に昭和初期とか歴史には興味があって。小学校の図書館に学習漫画ありますよね、『日本の歴史』とかああいうのを見てたんですよ。で、学校では歴史に関しては縄文とかあっちのほうから初めて、近代になると授業時間の関係で全然取り上げないですよ。僕も大正昭和の歴史については学校で習った覚えがないんですよ。授業でも戦争の思い出話を語る教師って

のがいたんですけど、戦争はもういやだとか戦争はもうやっちゃいけないとか、感傷的なことしか言わない。テレビでも終戦記念日の8月15日になると特番が組まれて、内容はやっぱり戦争はもういやだとかやっちゃいけないとか、感傷的な反戦……。僕も知識も分別もない子どもだった頃、そういう風潮に辟易してました。

でも、南京大虐殺は知らなかったですけど、朝鮮人強制連行については何となく知ってました。高校の時がおかしかったんですよ。僕は公立高校に進学したんですけど、いわゆる偏差値でいうと落ちこぼれ組になるんです。で、どんな学校かといいますと、大学に進学する人はクラスで数人しかいなくて、それもFランクの私立大に推薦で入る程度、残りは専門学校とか就職なんですよ。そういう学校なんです。教職員の組合の力が強くて、フェミニズムとかリベラリズムに染まった自由放任とか。生徒のほうも無気力無関心しらけていて、生徒の思想信条を尊重しろという趣旨で、学校の行事で日の丸を掲げなくて、卒業式でも君が代は歌わないとか、そういう学校でした。（それに対して）反発はありましたね。おかしいと思いました。

修学旅行は広島に行って、修学旅行の前に『はだしのゲン』ってありましたね。あの著者の中沢啓二氏を学校に招いて、体育館で講演会ってのがありまして。その講演会の後に中沢氏を囲んで座談会が行われたんですよ。僕はそれに参加しなかったんですけど、後で『会報』とかを通じて政治経済の教師が「天皇に戦争責任がある」って発言したのを知って、僕は明らかにおかしいことを言ってると思ったんですけど、自分には知識がなくて弁も立たないですから反論できなくて、自分の無力……。悔しかったんですね。これが今の人格形成に与えた早期の影響ですね。左（に対する嫌悪感）ですね。

世界史の教師、すごく教え方がうまいんですよ。その人は西洋東洋の歴史を古代から近代まで網羅して、そのお陰で全体の流れが（頭に）入ってるわけですよ。その教師も、第二次世界大戦の意義について、民主主義勢力と全体主義勢力が戦って、民主主義が勝利を収めたとかかかっている、と提示した。良いものと悪いものが戦って良いものが勝った、そういう風に教えてたんで、それはちょっと違うかなと。

左の言っているような「初めに悪いものがあって、

歴史は前途開く」との対立で、加害者と被害者の対立で説明するようなものには違和感を持ってました。僕はそういうものに対しては相対主義というのですかね、何が良いもので何が悪いものかを決めるのは軍事力だ、戦争に勝った者が正しくて負けたものが悪い。だから、僕もその当時は日本とドイツが悪者になったのは、戦争に負けたからであって、勝っていたら評価が違ってたと。それに対してクラスメートが、「ホロコーストってある、アウシュビッツでユダヤ人を大量に虐殺しているのだから、戦争に勝っても悪という評価は変わらない」なんて言うんです。僕は違う、戦争に勝てばそれも正当化される、そう言ったらへんな奴扱いされました。

この当時、自分の運命を変える本を読んだっていうか——トンデモ本になるんですけど、『ユダヤがわかると世界がみえてくる』——86年にそれ読んだんです。歴史修正主義との接点はユダヤ陰謀論、僕の場合そうなんです。この本を通じて『シオン賢者のプロトコル』——有名な偽書がある、ヒトラーの思想形成に大きな影響を与えた偽書ですね、あの存在を知って。この偽書なんです。僕の今の政治思想というのは、自分の人格形成、思想形成に大きな影響を与えてるっていうか、要はこの偽書の内容そのままなんです。この偽書の内容で世の中は動いていると思ったんです。ユダヤが世界を支配とかそういうのは信じてなかったんですけど、内容は本物だと思いました。これ(書籍を提示して)は97年に研究のために買ったのですが、僕のものの方の考え方の根底というのは、陰謀論的発想と愚民思想ですかね。

(こういう思想を受け入れたのは)左側の教師に対する反発ですね。イデオロギーに対して、自分のイデオロギーを確立しないといけないと思ったから。僕はそれで人間嫌いになりましたね。今までは小学校も中学校も、学校の近くに一流企業の社宅があったんです。ですから生徒の質も、要は進学校とか東大とかあっちの——善良な師弟が多かったんですけど、高校のときは偏差値の低い……層が全然違ったんですね。人間の層ですね。だから話が合わなくなっちゃったんです。だから教師も生徒もみんな嫌いでした。ですから、愚民思想ってすごくアピールするわけですよ。多数の人間というのは判断力を持たなくて少数の賢者が導いてやる、そういう思想に影響を受けた。なんか惹くものがあるんですね。左翼嫌

いになりましたね。あと歴史観も独自のもの、正しいものなんてない、力が決める、と。

大学は無気力になってましたね。浪人していいとこに入れなかったんで、空白の時代というんですかね。その頃は公務員試験の勉強してましたね。就職とかは考えてなくて。僕は人間的に営業に向いてないんですよ。そういう仕事に生き甲斐というか長く続けていく自信がなかったんで、はじめから公務員ですかね。国家二種には受かったんですよ、最終に残らなかっただけで。それから人生が白紙になったわけです。でも働かないと生活に苦勞するわけですからアルバイトするわけですよ。どうやって身を立てていこうか、というので競馬になるわけです。いろいろ頭を働かせて。それから株になって株の次がFXですかね、それで大きく当てるわけですよ。

5. ネット上の活動からリアルの活動へ

《教科書問題という契機》

(それまで活動していなかったのは) 昼間の仕事をしてたというのはありますよね、それを完全にやめたのは——やめたというクビになっちゃったんですけど——2004年12月17日で昼間の仕事はなくなって、あとは早朝の仕事しかない。あとはネット取引ですね。それで2005年を迎えるわけですけど、7月ですね、「つくる会」の教科書、自治体が採択するという。それに抗議する人が人間の鎖で、それが一時期ネット上ですごかったんですよ。逆に「人間の鎖をさらに囲むオフ」とかみたいなのが企画されて。これですね、韓国に対する排外主義を形成するきっかけが。何で韓国民団が日本の歴史教科書にいちいち文句言ってくるんだ、非常に不愉快に思ったんです。

同じ歴史上の出来事でも立場によって見方が違うのは当たり前なんです。ナポレオンはフランスにとっては英雄ですけど、ドイツやロシアにとっては侵略者なんです。だから共通の認識ってのはないんです。それは当たり前なんですけど、なんで韓国とあっちの見方に合わせないと歴史の歪曲とか極右とか非難されるのか、それが納得いかなかったですね。(2001年の教科書採択時は) 常時接続のネット環境がなかったんで何も……。新聞は読まないです、テレビも見ないです。ですから僕は拉致問題とか興味がないというか、興味持たなかったですね。在日

コリアンと左翼が結託して日本を悪くしているという世界で、これに対抗すべく自分も現実の世界で団体に所属して活躍しなければならないな、と思うようになったのがこれなんです。

《崇敬奉賛会への加入》

2005年の8月15日というのは、節目の年の靖国神社です。僕は、参拝じゃなくて見物に行ったんですが、それを見て感銘を受けて。それで靖国神社に崇敬奉賛会といって、信者じゃないんですけど参拝する人たちの組織というんですかね、同好会というんですかね、そこに青年部というのが新しくできたんですよ。そこに行けば僕と同じような志を持っているような仲間がいるんじゃないかと思って、それが2006年の僕の誕生日に加入したんですよ。でも、人間が全然違うんです。全然タイプが違うんです。政治的なことが、僕と同じような問題意識は持っていない、全然関係ない神道とかあっちの文化ですね。人間的にも面白くない、生真面目すぎて趣味志向も全然違う、話も合わなかったですね。ですから所属しても、活動とかあまりしなかったです。

2ちゃんねるで「参拝するオフ」とかで熱い議論が、僕もそれで興味を持って一度行ってみようかと思って。僕は国家主義とか民族主義とかいう要素は持っていないですよ、ノンポリですよ。(でも行ったのは)物見遊山ですね。在日コリアンとか左翼の人たちが靖国神社を攻撃しているわけです。ですからそういうところに行けば、同じ関心を持った人たちに会えるんじゃないかという期待がありました。

(感銘を受けたのは)参拝者がすごかったんですよ。20万人ですかね。場にそぐわないカトリック信者の団体とかも来ていましたし、これが今の時代のタイムリーな現場にいるんだな、という。

《ネットでの活動》

Yahoo!掲示板を通じて、同業者っていうんですかね——韓国とかあっちの方を叩くユーザーから力量を見込まれて、Mixiに誘われたんですよ。Mixiでコミュニティってあるじゃないですか、その移民反対同盟っていう……そこで「行動する保守」の有門大輔、あの人と接点を持つようになったんです。当時は「行動する保守」ってできてなかったんですけど、あの辺との活動家との接点はMixiなんです。それが

2007年5月4日ですね。書き込み見ると、参加した挨拶文を書いています。その当時から、(自分は)「中国韓国を対象とした排外主義を」と展開してますね。中国人というのは、中華街のような自分達だけの排他的なコミュニティを作る。中華思想ってのは差別思想というんですかね、「自分たちは人間で 周辺はけだものだ」そういう発想を持っている。そういう人たちが日本に入ってきて多数派になると、そこが中国になっちゃうから、こういうのをやめさせなければならないよと。

特徴としては、人種に対する嫌悪感というのは僕はないんですよ。中国人そのものに対してはあまり……むしろ彼らの発想を嫌ったんですよ。その当時、中国の雲南省で乱開発の禿山があって、これを緑化しよう……それをどうしたかという、緑のペンキで塗ったという事件があったんですよ。こういう自然に対するおかしい発想、感性——融和共存というのはできない。こういう人たちに日本の国土が荒らされることを、すごく敬遠する書き込みをしてましたね。ですから人じゃないんですよ。発想とか文化ですね、言葉なんかも。

Mixiの友達をマイミクっていうんですけど、この頃は政治系のユーザーがいなかったんですよ。音楽関係のばかりで。ですからそういう人たちの誤解を受けるのを恐れて、最初是有門さんを友達には加えなかったんですよ。Mixiで政治的な日記はまだ書いてなかったんですよ。こういうのはけんかの元になるんですよ。それが変わったのが翌年です。行動する保守の誕生するきっかけになった経緯ってご存知ですか？ 在特会と瀬戸さん、西村さん、この三者が共同で河野談話の白紙撤回を求める署名活動を始めたことがきっかけで結成されたんですよ。その前は何をやっていたかという、瀬戸さんのグループが中心になって維新政党・新風を応援してたじゃないですか。それが参院選で惨敗して。慰安婦問題はもともと主権回復のテーマなんですね。それが結成されて、いわゆるヘイト・スピーチの街宣をやるわけですよ。それを最初に見たのが2008年3月7日、議員会館前で行われたものですね。

(それまで在特会関連のサイトは)一切見てませんでした。在特会については、Mixiに加入する前に嫌韓の同業者にですね、そこを通じて会が発足するよという情報は得ています。発足記念集会に行くつ

もりでいたんですけど結局行かず、というのはあります。チャンネル桜で桜井さんが出ているものを Youtube で見たんですけど、特に魅力を感じなかったです。今みたいにマシンガントークで、ということではなく凡庸な——特に興味を持たなかったです。

この運動に加わるきっかけになった出来事が、長野聖火リレーなんですよ。Youtube で中国人留学生の乱暴狼藉な振る舞い——僕はこういう人たちだから日本に入れちゃいけないよって主張してたわけです。それが正に主張していた通りのことが起こっている。殴りつけてやりたいような衝動にかられて、今のうちに芽を摘んでおかないと将来大変なことになると思うので。このニュースを全然伝えなかったマスメディアの報道のあり方にも、すごい疑問と不信感を持ったんですね。大きな混乱もなく無事終了なんて、どうしてこういう嘘を平気で言うんだって。

これ以降は Mixi で中国人に対する悪口っていうんですね、そういう日記をずらずらって書くようになったんです。それで現場に初めていったのが、胡錦濤主席が来日して、日比谷で福田総理の晩餐会があって、そこが初参加です。でも、そこも靖国と同じで見物に行っただけなんです。そこで、うーん、この運動に加わろうと。この中でやろうと思いたね。(共感したのは)ストレートに感情を表現する。共産党に共感を持ったような理由と同じなんですよ。歯に衣着せぬ物言い、本音をそのままストレートにぶつける、そういう姿勢に共感を持ったんですよ。

《リアルな運動へ》

その当時は羞恥心と警戒心が入り混じった奇妙な、あとビデオにうつるのを嫌って、街宣参加者の輪の中になかなか入れなかったんですよ。ですから参加するといっても、遠巻きに彼らを監視している公安と同じ位置に立ちながらシュプレヒコールやったり、なんか随分おかしなことやってましたね。

加わるきっかけとなったのは、僕は最初「行動する保守」の3グループですね、瀬戸さん、西村さんと桜井さんですね。その中で瀬戸さんと西村さんは僕と世代が違うじゃないですか、だから敷居が高そうな感じがして、桜井さんに最初接近したんですよ。初めて話したのが2008年6月22日ですね。その時に声をかけたら、冷たくそっけない態度をとられて、

「ああそうですか」と。これで僕は在特会に最初入ろうと思ったんですけど、入る気なくしちゃって。——でも冷たいんじゃないって、桜井さんって元々そういう感じの人なんですよ。

でも同じ日の街宣で、非常によく通る声でわかりやすい演説をしていた弁士、若手弁士がいたんですよ。それが日護会の黒田大輔って、今はもう廃人同然になってますけど、あの人。「こんな人材が埋もれていたんだ」と思って、その日に Mixi で演説を讃えるようなメッセージを送って。7月1日も街宣の時に、現地に行って黒田君に挨拶したら、すごく感じがよかったんですよ。ああ、ここをベースにして行動する保守の活動に参加しようと思って。あとはこの当時は、毎日新聞の英語版がひどすぎるという記事で、ここの黒田君が毎日新聞変態祭——毎日新聞本社前で糾弾会をやったんですね。それに2008年はずっと皆勤で参加しています。そこで多くの活動家と出会って、そのうちの重要な出会いが主権回復を目指す会のナンバー2のカメラマンの細川勝一郎です。あの人との出会いが一番大きかったですね。僕は細川さん支持なんですよ。細川さんが離れたら、主権も支持できない。

日護会はどちらかというと過激なヘイトではなく穏健な保守が集まったんですよ。ポスティングやるような人たちが。そういう人たちの影響というか人間関係上、僕もそういう活動していた時期がありました。僕は日護会を基準にして、ベースにして活動する予定だったんですけど、それが東村山事件——それをきっかけに黒田君が毎日新聞から創価学会へ運動路線を切り替えちゃった。方向性の違いとか関心の違いから関係が薄くなっていった。それが黒田君との関係の始まりと終わりです。別にけんかしたわけじゃないです。ただ徐々にフェードアウトって。

それで、2009年の大きな激動の年です。一番運動が——カルデロン問題から始まって、暮れのチーム関西の朝鮮学校をピークにして。衆院選もあったり、外国人参政権の問題すごく大きくなった時期。(この頃に)ポスティングを僕はやっていて、それも一時的なものであとやめちゃったんですね。次の方向性を模索していた時期があって、あまりはっきり動いてないんですけどね。その後主権回復との接点ができるわけですが。

(「カルデロン問題」について)僕は関心なかった

んですよ。テーマが違うんで。外国人の不法滞在とかフィリピン人とか、どうでもよかったんです。ただメディアがかわいそう、かわいそうの同情論一色で世論を誘導するのをみて、「ああこれは胡散臭い、背後に朝鮮がいる」と思って、「徹底的に叩かなきゃ」。それは調べたわけじゃないんです、直感的に思っただけです。でも実際に調べたらやっぱりいる、一家支えていた弁護士ですね。調べたら従軍慰安婦ですかね、福島瑞穂と共に名を連ねている悪名高い弁護士だったんですね。やはり在日コリアンとか朝鮮のために働くような人たちが、カルデロン一家の背後で暗躍している。(こうしたことを)書き散らしたと思いますね、どこに書いたかは失念してしまったんですけど。(街宣にも)行きました。このデモ、反響というか特会の悪名が轟いた。在特会が全国同時で外国人参政権反対デモってやったんですよ。それも成功して、在特会の知名度が全国区になってしまったんですよね。そうすると在特会と主権回復の関係にひびが入り始めたんです。妬みとかやっかみですね。

《運動の過激化》

それが関係するのかわからないんですけど、主権回復の運動路線がすごい過激化するんですよ。すごい滅茶苦茶なことをやるんですね。チーム関西の伏線のような感じですね。僕は2009年の4月11日の浦和の栄光ゼミナール抗議ですかね、教材に南京大虐殺とか従軍慰安婦を盛り込んだ件で抗議に行ったんです。無許可街宣だったんですけど。南浦和のような辺鄙なところに機動隊が何台もバスを出して、機動隊と一触即発の・・・僕はすごい怖かったんですけど、なんともいえない高揚感だったんです。逮捕されるんじゃないかと思ひましてね。

帰りの電車で、主権回復の運転手——あの人と一緒に意気投合して。細川さんというのは運動に対して真面目だったんですよ。よく日記を書いていたんですね。運動に対するあり方とか日誌を書いて、僕はそういうところに自分の見解を投稿しているうちに認められて、参謀のような役目を果たすようになったんですけど。僕も自分なりの運動論というのを、この頃から発表するようになったというか。

主権回復の滅茶苦茶な運動路線、あれを正当化する理論作りですよ。僕はそういうのを作ったとい

うか。それはどういうことかといいますと、主張は政治テーマで広く一般に周知させるには、本当は全国ベースとして新聞とかテレビに取り上げてもらうことが一番効率いいんですね。でも報道機関というのは、権力のイヌなんですね。自分達に都合の悪いものは黙殺、都合のいいものは大きく大きさに取り上げて、メディアを支配する。メディアに取り上げられようと思って、どんなに常識的な——ヘイトスピーチなしに訴えても、体制にとって都合の悪いものであれば無視されるんですよ。たとえば外国人参政権反対とか移民受け入れ反対といっても…。これに対しては、政治的主張よりも自分達の存在そのものを知らしめることを優先させるんだ、そのためには支持や賛同を得ることを度外視して、過激な行動を演技でやってネットで配信して、存在が知れ渡れば彼らはどういう人なんだろうって興味を持つ人たちも出てくる。その結果として、自分達の政治的主張が拡散につながるのならば、政治目的は達成したとか、僕はそういう風に思ってたんです。

転換点となった出来事がありまして——関西の大馬鹿っていうんですかね、未熟なメンバーを主権回復が指導する形で新たに運動を始めたわけですけど、関西の人たちって優秀なんですね。すごい口がうまいというか、演技が。逆に暴走しすぎて刑事事件とか、そういう不安があったんですね。関西の人たちは感情表現がうまいんですよ。僕はこれを絶賛したんですけど、細川さんという人は違ったんです。批判を口にしたのは初めてだったんです。関西のメンバーは政治運動の経験がないから、警察との駆け引きが未熟だ、このままじゃ逮捕されちゃうって。それで初めて(自分も)イケイケから一転して。あと京都の件でチーム関西の知名度が全国区になって、主権との力関係が変わっちゃって言うことをきかなくなっちゃうんですね、勝手な行動をとる。それで主権との関係がまずくなって。最終的には除名になっちゃうんですけど。

《活動の動機》

(なぜ活動するのか) 西村さんの考えと同じで、社会悪を打倒するというか、やっつけるきっかけになればいいと思って。そのための狼煙を上げる作業だって、そういう風に解釈している。僕は街宣とかデモで世の中変わるとは思っていないんですよ。ただ

きっかけは作れるんじゃないかと思って。変わるきっかけですね。僕の立場は基本的には傍観者なんです。脇から見ていただけで。ただ、社会の不条理とか社会悪に憤って変えたいと思っている人があれば、力になってあげたいということです。

(最初は) なかなか輪に入ることができなかったんですよ。最初のステップとして日護会の街宣があったわけです。僕は別に演説とかするわけじゃないんです。参加しているときも、僕は活動家という意識はなかったわけです。ただ、僕はネット上で意見——それが本来の役割で、現場に「見に行く」というか、そういう関わり方ですね。ですから「参加したことはない」——活動家として参加したことはないともいえますね。それは今でも変わってないと思いますね。名前をさらさないし、演説もしないし。やっぱりリスクがあるじゃないですか、そうすることによる。それが小心であると同時に悪い人間だとか、卑怯だとか。まあ、それが1つの戦い方というんですかね、僕からは相手を攻撃できますけど、相手からは自分を見えない。卑怯とか言われますけど、僕はそういう戦い方というか。

(運動に参加しての変化) はありますね。似てくるんですよ。西村(修平)さんとか…。暴言を吐くようになりましたね。僕はどちらかというと思っていないことは言わないタイプです。人に気を遣うタイプで、自分が何かいったことで人を不愉快にしたり傷つけたりするが嫌で。そういうことを避けるために、自分が我慢して避けられるのだったら我慢する。何も文句を言わないタイプなんですよね。ですから損をすることが多いんですよ、今まで。

でもこれに参加することによって、ストレートに暴言吐くようになる。職場でもそうなんですけど、60代のパワーハラする問題がある人なんですけど、そういうのに「人間のくず」とか「死ぬ」とか言うようになりましたね。理不尽なことは我慢しなくて、言いたいことは何でも言って。逆に、職場の仲間の人たちからは評価されるわけです。パワーハラスメントとかそういう悪い人がいて、権限も何もないのに長くいるからやりたい放題やっている人がいるわけです。そういう人に、僕だけです、逆だったのは。皆がいえないことをぼんぼんストレートに言ってけんかして、最終的に影響力が排除されて。ですから人望が…。でも結構恨まれたりもしてますけどね。

でもあんまり褒められるようなことじゃないですよ。

自分の将来の人生とかも考えたわけですよ。つまらないことで将来の幸せな人生を棒に振ってしまうと困る、ということで下手なことをしない。自分の将来がなくなってくると、どうでもよくなってくる。それもあると思うんですよ。未来がないから、そういう状態で西村さんのような人を見て変わったとか。あの人の運動に参加する気はないですけど、今でも尊敬の念は変わらないです。

最近では排害社の池袋清掃に参加しているくらいで、運動に対する考え方の違いでどんどん溝ができてきています。行動する保守というのは、従軍慰安婦問題、河野談話の白紙撤回を目標に始まったものなんです。でもそれがなぜか、創価学会問題にはまって、話題になっている時事問題に乗り換えていって…。僕は慰安婦なら慰安婦で、1つに絞って続けていこうという考え方なんですけど、実際そうやる人はいないです。だから僕はロートとか吉本とかパチンコとか反対なんです。1つのことに集中して結果を出すことが大事だと思っています。原発問題が起きて、在特会は反原発を反日極左で原発維持推進を愛国者、そういう安易な設定で運動をやるうとしたことに対して、僕は反発して。あと素人の乱、あそこに原発デモに賛同メッセージ送ったりして。あまりにも幼稚な設定ですね、愛国反日という、そういうのにも冷やかな態度をとるようになりました。

排害社ってのは、「行動する保守」というのが崩壊する過程でできたんです。僕は金友君に、「行動する保守」の失敗を踏まえている指南したわけですよ。団体を作るな、組織にしちゃうと運営コストがとられるじゃないですか。まじめな政治目的で運動始めても、組織の維持が目的に入れ替わっちゃって。だから組織にしないことと、今までの運動というのは街宣とか鳴り物系のことしかやってないんで、もっとバラエティに富んだことやらないとダメだっていうか。そこで提案したのがクリーンボランティアっていうんですか、清掃ボランティアです。運動の建て直しのために、一時期排害社にてこ入れしました。

《外国人参政権について》

(知ったのは) そんなに前じゃないですね。参政

権自体は、別にどうでもいいんです。ただ韓国人が参政権を得るのは反対。韓国人だけ。中国人、韓国人に当たらなければ認めてもいいよ、という立場です。なぜかという、昔のことがあるんですね、過去の歴史が。過去の歴史に対する物言いに対する反発があるんですよね。彼らが本当に一方的な被害者なのかって。強制連行にしても、それは本当のことなんです、調べたら。でも、在日コリアンの来歴由来とは直接関係ないんですね。でも、自分たちは強制連行されてきて、とかそう主張するわけですから。自分達を正当化するための嘘つくわけですから、そういう人たちが日本の公権力に関与することには警戒心を持っているわけです。うそついて好き勝手させられたのではたまらない、そういう問題ですね。

中国人の場合は、ちょっと違うんですね。数で圧倒されちゃうという恐怖心ですね。あと、中国の人がいっぱい日本に入ってくると、日本企業はやっぱり商売ですから、彼らを対象にする商売するために、商品に向こうの簡体字を表記したりとか、従業員に中国の言葉を覚えさせるとか、そういうことをやるわけです。必須なんですね、必ず。でもそうすると、日本語だけでは日本で暮らしていけなくなる、そういう危機感なんです。ですから最終的に、お金のために国を売り渡しちゃうことになるんじゃないか、と危機感…。

《「慰安婦」問題について》

いろいろ興味があるのはあったんですけど、慰安婦に絞ったほうがいいんじゃないか。これを崩すというか。南京とは違って記録がないんですね。慰安婦がいたことは本当なんですけど、公権力が強制的に朝鮮の女性を動員して売春婦にした、それは事実ではないんですよ。でもそれが河野談話で政治的妥協というかそういうので認めてしまって、今の悪いことが起こっているんですよ。それを何とかしなければ、これを突破口にしなければ。一番崩しやすいんですね。戦略の問題です。

(なぜ歴史問題から排外主義に至るのか) 在日は過去の歴史を政治利用するじゃないですか。慰安婦じゃなくても、植民地、強制連行とか。在日朝鮮人は慰安婦のことは言わなくても、被害者としての歴史を口実に権利を主張しますよね。そういうものに対して嫌悪感があります。僕は当事者じゃないで

すから、過去の戦争や植民地支配に対して責任を負う立場じゃないんです。何か言われても僕は関係ないというんです。今の在日コリアンの三世四世も、植民地支配を受けたといっても受けた人たちの子孫であって昔のことに対する直接の被害者じゃない。でも、なぜ子孫の間で加害者と被害者の関係で向こうの人たちを尊重しなければならないとか、不満がありますね。なぜ向こうが弱者なのかと。一方的な被害の歴史をもとに政治的主張をするのはダメです。それなら半島に戻るべきじゃないか。

在日コリアンだけじゃなくて、かばう人たちが問題あると思いますね。僕は中国人韓国人には憎しみとか敵意を持っていないんです。向こうが何言っても無視すればいいじゃないか。でも、かばう人がいるんですね、日本人で。彼らの利益供与について。そういう人たちに対する反感が大きいんです。ですから在日朝鮮人の問題にしても、彼らそのものに対しては反感がないけれども、彼らの立場に立ってあれこれ擁護して気に入らないことがあるとレイシストとかレッテル貼る人には反感がありますね。僕の物言いに対してすべてレイシズムで片付けるんです。一切批判を受け付けません。そういう主張をしながら、彼らは「異なる価値観を認め合しましょう」とかそういうことを同時に言うんです。多文化共生とか。僕としては在日コリアンについては日本にいることは問題視していません。ただ政治的な主張をするのは勘弁してくれ、自分たちが被害者で日本が悪者だと、それをもとにして民族的主張とかいうのは危険だと。

6. 結語に代えて

ε氏は、生計の立て方がかなり特殊な部類に入っており、インターネットを使用する時間(空いた時間)が多くの人とは比較にならないくらい長い。それゆえ、彼自身は「リアル」の活動よりは「ネット」での活動を主に行ってきた。それは「警戒心が強い」という彼自身の性格にもよるだろう。彼を排外主義に誘ったのも、ネットにおける書き込みであり、インターネットにおいてネット右翼と呼びうる層による書き込みが目立つ現状と運動の関係についてより多面的な考察が必要だろう³。

³ この点については、不十分ながら北田(2005)や辻(2009,2011)

彼は自らの「将来がない」こと、思想の偏りなどを率直に語っている。これは、彼自身が運動からの離脱を考えていることとも関わるが、そうした自分を痛いほど自覚していることによるものだろう。だが同時に、彼は自らを「参謀」「力量を見込まれて」と表現する強烈な自負心が顔を覗かせる。そこに自らの生き甲斐があることを読み取るのはたやすいが、彼自身は自らが経験する剥奪感と運動参加との関係を否定している⁴。30代になってからの彼の不遇が、排外主義への傾斜になったわけではないとは確かにいう。ただし、それより遡れば人間嫌いだった高校時代の「トンデモ本」との出会い、それをきっかけとした「愚民思想」への傾斜など、「剥奪」で説明できないとは必ずしもいえない。

だが、これは短期的な剥奪といえるものではなく、青年期からの社会化との関係でみるような視点が必要になる。ある種思想への接近が、時を経て排外主義を生み出すような素地を持つのか、育った環境との関係で分析する必要性も示唆しているだろう。

文献

- 樋口直人, 2012a, 「在特会の論理(1)~(7)」『徳島大学社会科学研究』25号.
———, 2012b, 「在特会の論理(8)~(9)」『徳島大学地域科学研究』1号.
———, 2012c, 「『行動する保守』の論理(1)~(3)」『徳島大学地域科学研究』1号.
———, 2012d, 「在特会の論理(10)」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』8号.
———, 2012e, 「行動する保守の論理(4)」『茨城大学地域総合研究所年報』45号.
Kenneston, K., 1968, *Young Radicals: Notes on Committed Youth*, Harcourt, Brace & World. (=1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ』みすず書房.)
———, 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, Harcourt Brace Jovanovich. (=1977, 高田昭彦他訳『青年の異議申し立て』東京創元社.)

による仕事がある。

⁴ このあたりについては、彼による具体的な説明があるのだが、情報源秘匿のため公開できない部分があることをお断りしておく。

- 北田暁大, 2005, 『「嗤う」日本のナショナリズム』日本放送出版協会.
辻大介, 2009, 「調査データにみるネット右翼の実態」『Journalism』226: 62-69.
———, 2011, 「『ネット右翼』的なるものの虚実——調査データからの実証的検討」小谷敏他編『若者の現在』日本図書センター.

(付記) 科学研究費補助金によるプロジェクトの一部として本稿のもととなる調査はなされており、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。